

通信ビジネスをバージョンアップ 期待の「Telco2.0」とは何か

NGNの突破口となり得るコンセプトが登場した。Web2.0の考え方を多く取り入れた「Telco2.0」だ。チープ革命、マッシュアップ、ユーザー参加型、ロングテールなど、6つのキーワードからTelco2.0の可能性を解説する。

「インターネットと電話のいいとこ取り」 NTT持ち株の和田紀夫社長はNGNをこう表現するが、重要なのはここでいう「インターネット」が何を意味しているかだろう。

IPプロトコルなどのインターネット技術にとどまるものなのか、それともビジネスモデルをも取り込もうとしているのか。

「インターネットの世界では一足先にWeb1.0から2.0へと、サービスやビジネスモデルの在り方が変化した。では、通信事業者は今後どこに向かって進むのか。NGNの構築と平行して議論していく必要がある」

日本ヒューレット・パッカートの伊藤亮三シニアエグゼクティブコンサルタントはこのように問題提起するが、NGN時代のサービス像、ひいてはビ

ジネスモデルを考えていくうえで、Web2.0的発想をどう取り入れていくかは、きわめて重要なテーマとなるだろう。

「NGN時代のサービスは、インターネットモデルが主流になっていくと考えている」とKDDIの沖中秀夫執行役員が語るように、具体像はまだ描き切れていないものの、すでに模索は始まっている。

こうした中、最近、Web2.0のテレコム版といえる「Telco2.0」というコンセプトをIBMやマイクロソフトなどのベンダーが提唱し始めている。Web2.0と同様、明確な定義があるわけではないが、NGN時代のサービスやビジネスモデルを表すのに、ふさわしい言葉であることは間違いない。

図5はNTT東日本のここ3年間の

営業収益の推移を示したものだ。止まらない音声伝送収入の落ち込みをカバーする方法は、現状のビジネスモデルのままでは、到底見つけられない。通信事業者は今、バージョンアップを強く求められているのだ。

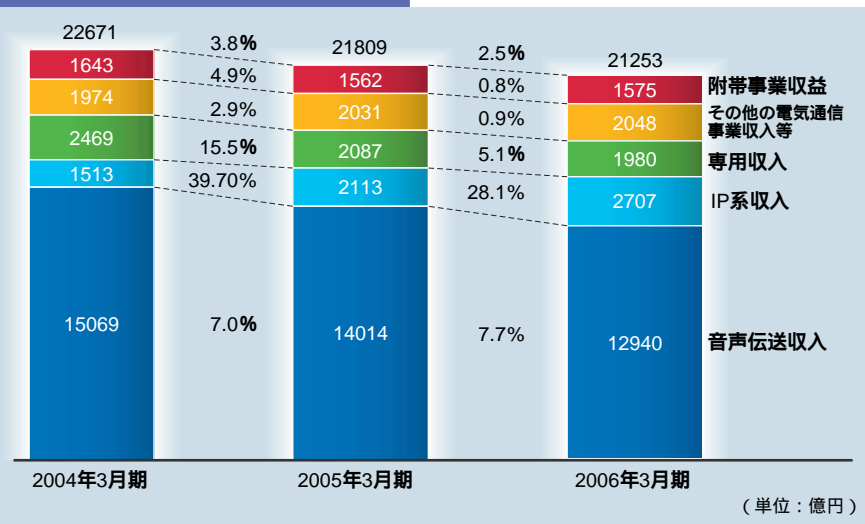
インターネットと電話のいいとこ取りとは、IT技術と通信技術の融合とも言え換えられる。Telco2.0を実現していく上で重要なのはIT技術だ。IT業界の巨人である日本IBM、日本ヒューレット・パッカート、マイクロソフト、日本オラクルへの取材をベースに、6つのキーワードからTelco2.0の実像に迫っていく。

keyword 1 チープ革命

昨今のITの隆盛をひも解く要因の1つとして、度々取り上げられるキーワードが「チープ革命」だ。

チープ革命とは、ムーアの法則に代表されるような、モノやサービスの著しい価格低下が導き出す、社会の革命的变化のこと。例えば、PCや携帯電話の国民的普及もチープ革命の恩恵の1つとして挙げられる。もちろん、通信事業者にとって宿敵ともいえるインターネットの発展も、チープ革

図5 NTT東日本の営業収益の推移



必要なのは「サイロ型」からの脱出 サービス開発コストは劇的に下がる

最近、通信事業者向けのビジネスに大変力を入れられていますね。

星野 当社の提案を一言でいえば、「サービスの作り方を根本的に変えてしましましょう」ということです。

従来、テレコムのアプリケーションの作り方は完全なサイロ型でした。課金システムなど共用化できる部分はたくさんありますが、VoIPならVoIP用、IPTVならIPTV用と別々に作っていたわけです。しかも、汎用のコンポーネントを利用するのではなく、上から下まですべて作り込む形です。

ITの世界にいる我々からすれば、こうした開発手法というのは、きわめて近代的です。

IBMのソリューションを導入すれば、劇的にサービスの開発コストを下げる事ができます。

部分最適ではなく、全体最適への転換ですね。サービスの作り方が変われば、生まれてくるサービスも変わるのではないですか。

森田 当社ではノーテルと共同で、ある携帯電話向けゲームのデモを開発しました。これは、オンライン状態にある仲間に、「ゲームをやりませんか」と招待状を送れるものです。ただゲームをするだけでなく、VoIPで会話もできます。このようなサービスは今までにないものですが、そこで使われているのは、すでにある既存のコンポーネントです。

星野 こうしたサービスのことを「コンポジットサービス」と言っていますが、サービスの開発期間も大幅に短縮できます。例えば、今まで早くても90日くらいかかっていたものが、十数日で実現できるようになるのです。

プレゼンスやロケーション、認証、テレビ電話など、コンポジットサービスとなり得るイネーブラーは、すでに数多くあるわけです。今後はこれらを組み合わせることで、新しいニーズに基づいた新しいサービスをすぐに開始できる世界になります。

森田 CAPEXやOPEXの削減には限界



NGN CTO
IBM ディスティングイッシュド・エンジニア
森田 博文氏



先進システム事業部
理事 事業部長
星野 裕氏

があります。サービスを増やさないことには、収益は増えていきません。

まさにマッシュアップですね。森田 ええ。IBMでは、Telco2.0という呼び方で紹介しています。Webの技術を積極的に取り込んでいくことが、テレコムの世界でも重要になっていくでしょう。

星野 ここでインターネットと大きく違う点は、セキュアかつQoS制御されたネットワークサービスだということです。ですから、インターネットより多少高くてもいいわけです。

命なくしてあり得なかった。

このチープ革命の波が今、通信サービスの開発現場にも押し寄せようとしている。

鍵を握るのは、リユース(再利用)や共通コンポーネントといった、今まで通信業界にはほとんど浸透していなかった考え方だ。そして、これを実現するのが、パート1でも紹介したSDPである。

SDPとは、呼制御、コンテンツ管理、プレゼンス、位置情報、課金などのコ

ンポーネントから構成される共通のサービス開発・実行基盤だ。サービスごとにシステムを一から作り込まなくとも、SDP上のコンポーネントを組み合わることで新サービスを開発できる。その結果、「開発コストと開発期間はケタ違いに下げられる」と日本IBM先進システム事業部の星野裕理事 事業部長は語る。

その効果は、事業コストの節約だけではない。新サービス開発に必要なコストと時間を大きく改善できれ

ば、次々と新しいチャレンジに取り組める。また、新しく生まれたニーズにも即応できる。つまり、多様なサービスを生み出す土壌が出来上がるわけだ。

インターネットの世界では、Yahoo!やGoogleなどのベンチャー企業が、短期間で巨大企業に成長していった。一方、その陰では、数多のベンチャー企業が陽の目を見ずに消えていっている。何が成功するかは誰も事前には知りえない。今日のインター